

編集後記

根本 哲生 昭和大学横浜市北部病院臨床病理診断科

食道癌診療トピックス2022をお届けする。本誌名も「胃と腸」であり、胃と腸に比べ食道は関心の低い領域なのかもしれない、などと拗ねてみたくなるが、本号では、マニアックに狭い範囲を掘り下げるというよりは、多くの読者が興味を持てるよう、トピックス形式として幅広い話題を取り上げた。

今回、1) 病理、2) 扁平上皮癌、3) 腺癌という3つの主題を掲げたが、見方を変えるとa) 非飲酒・非喫煙者における食道癌、b) 食道上皮内腫瘍を含む初期病変・多発病変、c) Barrett 食道腺癌、d) 診断のストラテジー・モダリティ、e) 治療のストラテジー・モダリティのように各稿を分類することもできる。

まず非飲酒・非喫煙者の食道癌であるが、立石は第81回食道色素研究会の世話人として全国から蒐集した症例について解析を行った。女性、0-IIa型、まだら食道や重複癌は少なく、GERDを伴う、といったこれまで漠然と考えられていた臨床的特徴が104例から裏付けられた。小田も、まだら不染の有無という切り口から、まだら不染のない背景から発生する癌症例は、より肛門側に多く、飲酒量が少なく、女性の症例の割合が高いという、立石論文を支持する結果を示した。いずれもGERD/逆流性食道炎が発生に関与する可能性が示唆され、遺伝子変異なども含めた今後の発展に期待したい。

初期病変・多発病変の問題では、まず新井が本誌57巻3号の特集「食道上皮内腫瘍の診断と取り扱い」を振り返り、その臨床病理学的特徴と病理診断過程について述べた。上皮内腫瘍は直ちに治療する必要のない、経過観察可能な病変として想定されることから、経過観察の過程で、「いつ切除に踏み切るか」の判断が重要となる。飯塚は病変のサイズ増大、色調変化、典型的なType B1血管の出現が目安になるとした。単施設、比較的少数例の検討ではあるが、具体的な提案であり参考になる。

Barrett 食道 (BE) および BE 腺癌 (BAC) についてのトピックスは、藤島がその病理について、特に低異型度腫瘍性病変に着目して検討した。BACは低異型度成分を辺縁に含むことは多いが、中心部、厚みのある部分には強い異型がみられること、粘膜の薄い低異型度成分のみの病変が粘膜下へ浸潤することはまれであるとした。これは内視鏡医・病理医にとって「安心材料」であるが、内視鏡観察の重要性を示すものとも言えよう。竹内は日本食道学会提

唱のBEに対するNBI拡大内視鏡分類 (JES-BE分類) が実臨床で有用であることを示し、池之山は、BACで異時多発する症例の特徴はBE長が長いこと、腸上皮化生の割合が高いことを示した。そうなるとlong-segment (LS) BEに発生した癌のマネジメントが重要となるが、平澤は低異型度病変が広く分布するLSBEに対するstepwise ESDの症例を紹介しながら方法と有用性を述べた。

進歩が続く診断モダリティでは、熊谷が高倍率で核所見を評価する超拡大内視鏡の有用性を解説し、この装置を用いたAI診断における病変拾い上げ・診断精度はエキスパート内視鏡医・病理医と同等以上の成績としている。一方、谷論文では核染色を行わない白色光およびNBI/BLIの非拡大・拡大画像のAI診断システムを開発し、拾い上げ、癌・非癌の判断、EP～SM1・SM2以深の深達度判断において、内視鏡医と同等の成績であったとし、こちらも実用化・普及が期待される。

現行のガイドラインでcT1b食道癌に推奨される化学放射線療法 (CRT) であるが、病理の立場からは、cT1bの正誤が病理学的に検証されない、「いきなりCRT」は如何なものかと感じていた。JCOG0508試験の結果を受け、cT1bの治療ストラテジーにESD先行コースが設定されるのは妥当と考えられ、吉永論文でも良好な結果が示された。治療モダリティでは玉置が化学放射線治療後の光線力学的療法が好成績を挙げていることを紹介し、高橋は多発ヨード不染を背景に異時多発する扁平上皮癌にRFA (radiofrequency ablation) が効果的であった1例を報告した。RFAはいまだ本邦での薬事承認がなされていないが、新しい技術とその特徴・適応を知るために価値ある論文である。

ESD技術の進歩により広範囲の切除は可能となったが、術後の狭窄は大きな問題である。門田が主にステロイド局注および内服療法といった薬物療法の点から、増永が内視鏡的癒着切開術、radial incision and cutting法といった内視鏡外科の手技の点から狭窄への対応の最前線と今後の展望について述べている。

以上の内容は、食道マニアはもとより、日常、食道疾患の内視鏡治療までは手掛けない読者にとっても、食道癌診断・治療の最前線を知る意味で役立つものとなったと考えている。